

どうも、俺たちはひどく嫌われているらしい。

(よくあることだ)

それ自体は当たり前のことで、驚くようなことでもない。

そう——なにしろ俺たちは軍隊だ。《女神》セネルヴァを擁する第五聖騎士団とはいえ、根本のところは変わらない。なにかと偉そうで、物騒で、特権的に民間物資を買いたたく。兵隊は軍票を支払いに使い、換金が面倒で、市場からはまったく歓迎されない。

それに、普段は殺人を仕事にするのが兵隊だ。異形を相手にすることも多いが、賊徒の討伐なんかもたまにある。反乱は、さすがに最近ほとんどないが。

だから、いくら嫌われたところで、騒ぐようなことではない——兵士が市民と問題さえ起こさなければ、それでいい。

ただ、そういう市民感情というものを気にするやつが、ウチの部隊には存在する。

「ザイロ・フォルバーツ聖騎士団長。恐れながら進言します」

と、そいつは生真面目な顔で言ってきた。

「嫌われるにも、限度というものがあります」

セウイル・デクスターという男で、俺の副官を務める男だ。

訓練を終え、軍営に戻ると、真つ先に小言のような忠告を口にしてきた。あいつも疲れているだろうに、具足を脱ぐよりも先に言い出したのだから、相当に気になっていたに違いない。

「もう少し、市民からの好感度というものを気にしてください」

「十分に気にしてる。軍紀はちゃんと引き締めてるだろう」

俺は籠手を外しながら答える。

「まさか、市民に暴力を振るうやつでもいたか？　すぐに連れてこい。それとも、あれか——軍票も支払わないで買物するとか？」

「そのような者は、さすがにおりませんが……」

暴行に、違法徴発。

どちらもただの犯罪だ。俺たち第五聖騎士団では、通常の部隊よりも重い制裁が待っているし、監視も厳しくしていた。いまのところ、その規律が緩むような長期滞在でもない。

特に、このセウイル・デクスターが手綱を締めている以上は、まずあり得ない。

「現状は規律に問題ありません。兵たちは不足しがちな物資にも耐え、市民との交流は最小限に抑えています」

「なら、仕方ないだろ。すぐに出ていくんだ。もう少し我慢してもらっとけ」

俺たちが駐屯しているのは、リッセカート市という街だった。

山岳都市リッセカート、ともいう。険しい山に囲まれ、昔から防衛の要衝として知られてきた。

ここから東の山脈を越え、砲撃都市ノーファンを指すというのが、軍部ガルトウイルが立案した進軍計画だった。

「物資の不足も、近いうちに解消する。リュフェンの部隊が合流してくるからな」

リュフェン・カウロンという。第六聖騎士団を率いる男の名前だ。兵站の差配について、連合王

国はほとんどあいつの才覚に頼っているといってもいい。

バケモノみたいな頭と感覚をしているやつだ。リュフェンと合流しさえすれば、山の中で不足しがちな物資もどうにかなるだろうと思えた。リュフェンからの伝令が来たのが昨日だったから、予定通りに動ければ、もう間もなく到着するはずだった。

よって、当面の問題は何もない。好感度を気にしている余裕があるわけでもない。

「セウイル、お前も余計なことばかり考えるな。物資の管理とか軍紀の引き締めとか、たしかにお前には迷惑かけてるけどな」

好感度よりも、兵隊を戦場でいかに生き残らせるかの方がずっと重要なことだった。

「もしかして、いい加減副官の業務に嫌気が差したか？」

「それはありません。私の役目です。自ら進んで担っていることですから」

その言葉には、若干の諦めも滲んでいる。うちの部隊で、こういう差配にもっとも向いているのがセウイルだ。それに比べると他のやつは——俺を含めて、向いている性格をしていない。

その分、負担をかけているのもわかる。だから市民感情などの細かい部分に目が行くのだろう、と俺は思った。

「考えすぎなんだよ、お前は。なんか気晴らしでもしろ」

セウイル・デクスターはいつも考えすぎている。それを押しつけているのは俺だ。多少は責任を感じないでもない。俺は椅子にもたれかかり、セウイルを横目に見た。

「狩りは無理だが、久しぶりに酒でも飲みに行くか？　ちょうど、いい店をエフマットのやつが探してきた。ハンクナーのやつも誘おうぜ」

「やめておきます。いまの状況下では、酒も貴重な物資です。ただ、その……」

「あ？　なんだよ」

「私の意見では、市民の好感度は、決して無視できるものではないと……。そうです。あくまでも副官の立場から、強く思いまして……」

セウイルが急に口ごもった。

こいつの欠点は、隠しごとが苦手な性分だ。嘘をつくのはもっと向いていない。それは俺の副官としては、非常に望ましい性質でもあった。

「なるほど、わかった」

セウイルの様子で、俺はこの話題の背後にいる『黒幕』の存在に気づいた。そいつがセウイルに余計なことを吹き込んだに違いない。

「お前だな？」

部屋の入り口を見る。扉をわずかに開けて、その隙間から覗き込んでいる瞳がある。いつも微笑しているような柔らかさのある、中性的な顔。

そいつの名前を、俺は知っていた。

「セネルヴァ」

俺は、俺たちの部隊の象徴でもある、城砦の《女神》の名を呼んだ。

「そんなところで覗いててどうする。入ってこいよ」

「……申し訳ありません、セネルヴァ様」

セウイルは本当に心の底から申し訳なきように、頭を下げた。

「気づかれてしまいました」

「うーん、仕方ないなあ」

セネルヴァはもう隠れるつもりもなく、ぎい、ぎい、と扉を弄ぶように開閉してみせた。

「ぼくの口からは言いたくなかったんだけど」

そうして、セネルヴァは首を傾げた。

「でも、ザイロ、本当のことだよ」

「何がだよ」

「市民の皆さんと、もつと触れ合った方がいい。きみたち、すごく怖がられてるよ」

言いながら、あいつは俺を指差した。

「特に、きみは」

「馬鹿か。怖がられるのは当たり前だ」

人を殺せる武器を持ち、それを扱う訓練を受けたやつらが、街を徘徊している。これはあまりにも物騒すぎる。俺たちはそのことに自覚的であるべきだし、普通の市民は大いにそれを怖がるべきだと思う。『好かれる兵隊』なんていう欺瞞は、ガルトウイルの上層部の妄言だ。

ただ、セネルヴァの意見は違うらしかった。

「ぼくはただ、聖騎士団のみんなのいいところを知ってもらいたいんだ」

そんな風に言っつて、あいつは両手を広げてみせた。詐欺師の仕草のようだった。

「市民を安心させるのも、ぼくたちの仕事だろう？ なにしろ、ぼくは《女神》だからね」

一理ある、かもしれない。俺たち聖騎士団は普通の軍隊とは、たしかに違うところがある。好かれる兵隊でないとしても、敬意を払ってもらえる軍隊でなければならぬ——かもしれない。少なくとも《女神》セネルヴァにとっては、ある程度は必要なことだろう。

俺が沈黙したのを好機と悟ったのか、セネルヴァはセウイルに目配せをしてみせた。ぎいっ、と扉を半開きにして、囁くように告げた。

「ほら、セウイル。いまだ。側面援護だよ！」

「あっ——は、はい！」

慌てたような直立と、敬礼。素直すぎる。

「援護いたします——団長！ 私もまったく同意見です！ 市民からの好感度の上昇は、円滑な兵站上の交渉行動にも多大な影響があり、無視できないものと思われまます！」

セウイルのやつは実に忠実で、うんざりするほど真面目だ。とはいえ、さすがに俺の説得の仕方をよくわかっていやがる。

「——わかったよ」

俺はこの二人の連合軍に対して、降参することにした。

セネルヴァとセウイルが、日頃からの俺の無茶ぶりに報いろうと言うのであれば、俺にはまったくなんの異論もない。散々世話になっているからだ。

たとえどれだけの労力を払ったとしても、状況が許す限りは、この二人の願いを聞いてやるべきだと思う。

「要するに、セネルヴァ。俺は何をすりゃいいんだ？」

「署名会をやろうよ」

セネルヴァは、ようやくちゃんと扉を開けて、部屋に踏み込んできた。

署名会というのは、市民の持ち物に名前を記す行為のことだ。神殿にとつてある種の祭りといってもいい。《女神》と、それに仕える聖騎士団の署名には特別な力が宿り、幸運や魔除けのお守りになる——と、信じる者もいる。そうでなくても縁起のいいものだ。

本人たちがそう思い込んでいれば、意味がある。

「署名会か。準備が面倒なんだよな」

よせばいいのに、俺はつい憂鬱ゆううつそうな台詞せりふを口にした。馬鹿だ。こんなときくらい、二つ返事で了解してやればいいものを。セネルヴァの微笑が、それとわからない程度に曇るのがわかった。

頭を掻きむしり、言い直す。

「でもまあ……悪くない」

我ながら、変な言い回しになってしまった。それでも続けざるを得ない。

「署名会。やってもいいぜ。辻つじでやるか？」

「まさか！ 栄光あるぼくと、ぼくの聖騎士団が辻つじで署名なんて寂しいよ」

言いながら、セネルヴァは後ろ手に扉を閉める。まるで退路を塞ふさぐように。

「ぼくたちの署名会だ。大いに盛り上げてほしい。街の真ん中にある神殿を借りてやろうよ！」

「無茶を言いやがる。どれだけ手間がかかると思ってたんだ」

「それは大丈夫。こんなこともあるのかと！ 実は、もう準備を進めててね」

セネルヴァは俺の顔を覗のぞき込んだ。悪だくみをしているときの顔だった。

「みんな協力してくれるって。あとはきみだけだったんだ」

「みんなって、誰だよ」

「エフマットに、ディーレのお姉ちゃんと、妹くん」

「俺以外、ほぼ全員じゃねえか……」

我が部隊の狙撃兵長そげきへいちょうに、歩兵隊長、砲兵隊長。つまりほとんど俺以外のみんなに根回しが済んでいたということだ。完全に段取りが終わっている。さすがにハンクナー騎兵隊長だけは、この計画に賛同していない。そのことがせめてもの救いだっただ。

「ようやくわかったようだね。ザイロ・フォルバーツ、きみは完全に包囲されている」

と、セネルヴァは片目を閉じてみせた。

「どうかな？」

「わかった。やればいいんだろ」

「素晴らしい」

セネルヴァは本当に嬉うれしそうに笑った。

「それでこそ我が騎士、ザイロ・フォルバーツだ」

ひどいペテンにかけられた気がする。セネルヴァは詐欺師としても立派にやっていける《女神》ではないだろうか。

「この司祭に声をかけとけ。やるならちゃんと準備しろよ。セウイル、お前も——」  
言いかけた、俺の言葉を、乱暴な足音が遮った。セネルヴァがせっかく閉めた扉を、ノックもせず勢いよく開くやつがいる。

バレア・ディーレという。うちの部隊の歩兵隊長の一人で、主に偵察任務を担当する。妹も砲兵隊長として所属していることから、ディーレ姉妹の姉の方、とか呼ばれることもある。というより本人たちがそう名乗っている。

彼女はいつもの——どこか少し能天気に見ええるような笑顔で敬礼を試みせた。

「団長！ ガルトウイルからの伝令！ 新しい任務が——あら？」

と、そこまで勢いに任せて喋りながら、口元に手を当てた。セウイルとセネルヴァに気づいたらしく、二人を交互に見る。

「まさか。何か極秘の作戦会議でもしてた？」

「まあな。だが、中断ってことになりそうだな」

「あ！ そうか、そうだった。署名会！」

手を打って、ディーレ姉は悔しそうな顔をしてみせる。表情のよく変わるやつだ。

「密かに計画してたんだった。うわあ……ごめんなさい、セネルヴァ様」

彼女は拝むように両手を組んで、ひざまず 膝ききえしてみせた。

「火急の用件らしいんです」

「仕方ないさ。任務が終わってから、勝利を祝って盛大にやるのも悪くない」

セネルヴァは首を振り、俺を見上げる。

「そうだね、ザイロ？ 今回だって楽勝だろう？」

「そいつは内容を聞いてからだ。けど、まあ——」

俺はゆっくり立ち上がる。せっかく外した具足を、またつけることになりそうだな。

「負ける気は一切ない。俺たちは死ぬほど強いからな」

セネルヴァは、満足そうに笑った。

この手の強気の発言を、ことのほか好む《女神》だった。

